

小学校教師特有のストレスコーピングに関する研究

——尺度開発と尺度モデルの検討

松尾 一 絵

桜美林大学大学院国際学研究所
人間科学専攻健康心理学専修

清水 安 夫

桜美林大学健康福祉学群健康科学専修

問題と目的

現在、学校教師のストレス問題が顕在化し、その改善が急務となっている。中島(2000)によると、教師の場合、一般勤労者に比べて、職場内でのストレスの占める割合が大きいのが特徴であると言う。そのため、職務上のストレスを低減させる方策の検討が重要であると考えられている。

従来、職業性ストレスの問題は、Lazarus & Folkman(1984)のトランスアクションル・モデルで解釈する機会が多く、「刺激(ストレス)→認知的評価→コーピング→ストレス反応」という一連のプロセスの中で、ストレス反応への影響が考察されている。その中でも、コーピングは、調整変数として介入すると考えられ、介入方法を検討する上で重要な変数として位置づけられている。

教師のストレス問題の緩和要因としてコーピングを検討する場合、従来のコーピングモデルの検討に加え、教師が所属する学校環境や教育の対象となる児童・生徒の発達段階等、職業的特性を考慮したモデルでの検討が必要である。特に、我が国における小・中・高校の各学校段階では、教科担任制や学級担任制の違い、部活動指導の有無、生徒指導や保護者との関係など、教師の業務内容や職場環境は大きく異なり、所属する学校の種別により、教師のストレスや必要となるコーピング方略も異なることが予測される。そこで、本研究では、小学校教師を対象者としたコーピング尺度の構造的特徴の検討を行った。

方 法

調査時期及び調査対象

2005年2月～3月、東京都、神奈川県内の公立小学校26校の現職教員933名を対象に、留置き法による質問紙調査を行い、522名(55.95%)より回答が得られた。分析には、記入漏れを除いた有効回答367名(39.34%、男性122名、女性242名、無回答3名、平均年齢40.21歳、SD=11.43)を分析に使用した。なお、個人情報保護の観点から、無記名式・任意回答・各自封筒に厳封の上での回収にて調査協

力を依頼した。

調査内容及び調査方法

個人の属性及び小学校教師版コーピング尺度への回答を求めた。小学校教師版コーピング尺度は、高校教師用コーピング尺度(清水・大宮,2002)から項目を選定し、調査協力者の負担を軽減するために文章を短く、項目数の削減を行った。また、現在の小学校教師の現状に即した項目を選定するために、小学校教師のコーピング手段として採択される可能性が低いと考えられる項目の削減を心理学の専門家と合議の上で行い、最終的に25項目を仮説的に設定した。なお、質問紙の教示及び回答は、学校において、トラブル(事件・事故・失敗・対人問題等)が発生した際、どのように対処するか、トラブルの状況を想定した場合に、個人が採択する対処方法を5件法にて回答を求めた。

統計処理

1. 探索的因子分析

コーピング尺度の因子構造を明らかにするために、探索的因子分析(最尤法・Promax回転)を実施した。

2. 検証的因子分析及び信頼性分析

構成概念妥当性を検討するために、検証的因子分析(最尤法)を行った。また、各因子の信頼性を検証するために、Cronbach's α の算出を行った。

3. 階層的クラスター分析と高次因子分析モデル

探索的因子分析によって抽出された各因子を類型化するために、各因子の尺度得点を用いて、Ward連結法による階層的クラスター分析を行った。さらに、類型化されたモデルに従って、各因子の尺度得点を観測変数、クラスター分析によって得られた2つのクラスターを1次因子、コーピング全体を2次因子とした高次因子分析モデルの検討を行った。

結 果

1. 探索的因子分析による因子構造の検討

分析の結果、固有値1.0以上で、解釈可能な4因子16項目が抽出された(Table 1)。各因子を構成する項目内容より、第1因子は「共感的コーピング」、第2因子は「回避的コー

Table 1 小学校教師版コーピング尺度のパターン行列（最尤法・Promax 回転）

		因 子			
		F1：共感的 コーピング ($\alpha=.816$)	F2：回避的 コーピング ($\alpha=.819$)	F3：援助希求 コーピング ($\alpha=.801$)	F4：楽観的 コーピング ($\alpha=.773$)
7	相手の視点に立ってみる	.865	-.009	-.019	.002
2	相手の気持ちになって考える	.771	-.025	-.103	.023
12	相手を理解するように努力する	.727	-.450	.066	-.013
22	自分の悪いところを反省する	.572	-.001	.061	.078
25	問題の相手を忘れるようにする	.028	.912	.008	-.036
15	問題の相手と関わりを持たないようにする	-.014	.855	-.088	-.033
19	問題を避ける	-.011	.759	.048	.117
4	問題を考えない	-.126	.404	.083	-.003
21	他の児童・生徒に援助を頼む	-.068	.017	.944	.123
16	他の児童・生徒に相談をする	-.078	-.013	.816	.071
6	保護者に相談する	.139	-.072	.498	-.185
11	保護者の援助を頼む	.182	.101	.477	-.219
13	そのようなものだ割り切る	.010	.015	-.009	.766
8	自然の成り行きに任せる	-.010	.034	.037	.696
18	そのことにこだわらないようにする	.125	.139	.003	.649
23	何とか成ると思う	.006	-.110	.007	.612
因子間相関	F1	—			
	F2	-.493	—		
	F3	.356	-.222	—	
	F4	-.342	.655	-.218	—

ピング」、第3因子は「援助希求コーピング」、第4因子は「楽観的コーピング」と命名した。

2. 構成概念妥当性の検討及び信頼性分析

探索的因子分析によって採択された4因子16項目をもとに、検証的因子分析（最尤法）を行った結果、適合度指標は GFI=.926, AGFI=.895, CFI=.945, RMSEA=.064 を示した。また、各因子の信頼性係数は、 $\alpha=.773\sim.819$ (Table 1) を示した。

3. 階層的クラスター分析及び高次因子分析モデルの検討

クラスター分析の結果、解釈可能な2つのクラスターが抽出された。第1クラスターは、「共感的コーピング」と「援助希求コーピング」で構成され、第2クラスターは、「回避的コーピング」と「楽観的コーピング」で構成された。この結果は、Lazarus & Folkman (1984) の「問題焦点型コーピング（問題の所在の明確化、情報収集、解決策の考案や実行）」と「情動焦点型コーピング（回避、静観、気晴らし）」の分類化とほぼ内容が一致していたため、第1クラスターを「問題焦点型コーピング」、第2クラスターを「情動焦点型コーピング」と命名した。さらに、2つに分類されたクラスターを1次因子とし、尺度全体を2次因子とした高次因子分析を行った。その結果、尺度全体の適合度は GFI=.993,

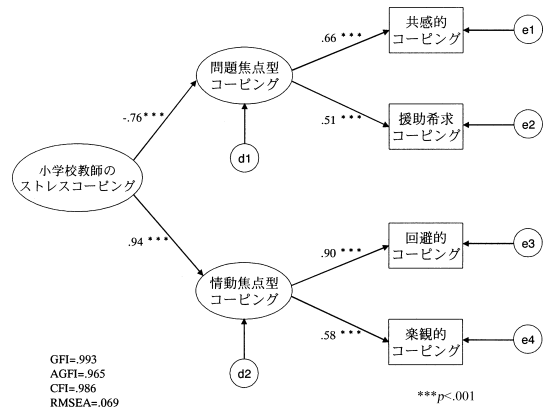


Figure 1 高次因子分析モデル（標準化解）

AGFI=.965, CFI=.986, RMSEA=.069 であった (Figure 1)。

考 察

本研究の小学校版のコーピング尺度では、先行研究の高校版における「人間関係」と「職務等」の問題回避が1因

子に集約されるなど、高校教師版との違いを示した。また、抽出された4因子は、問題焦点型と情動焦点型に類型化され、2次因子構造を示した。両因子は、負の相関関係 (Figure 1) にあり、Lazarus & Folkman (1984) が示す、相互に促進的または抑制的に影響し合う関係にあるというコーピングモデルの特性を支持した。

Holmes & Stevenson (1990) は、情動焦点型コーピングには、ストレスに対して心身のネガティブな状態を増幅させる機能があることを指摘している。そのため、回避的・楽観的コーピングを採択する傾向にある教師には、共感的・援助希求コーピングの機能的有効性を解説し、その具体的手法を習得させることが好ましいと考えられる。Janis & Mann (1977) は、ストレス問題を解決するのに必要な技能として、1) 適切な情報を収集する能力、2) 問題の所在を明らかにする状況分析能力、3) 適切なコーピングのプランを選び出し実践する能力をあげている。このため、教員研修会等において、本尺度を活用してフィードバックを行い、教師自身のコーピング採択の自己認知の促進やコーピング・プラン選択の際、好ましい方向への意識の転換を図るためのアドヴァイス等への応用性が期待される。

今後は、コーピング採択の規定要因と考えられているセルフ・エフィカシーやソーシャル・サポートを変数として

加えたモデルでの分析を行い、教師のコーピング方略を詳細に検討し、教師のストレス問題の緩和に貢献したいと考える。

引用文献

- Holmes, J. A., & Stevenson, C. A. (1990). Differential effects of avoidant and attentional coping strategies on adaptation to chronic and recent-onset pain. *Health Psychology*, *9*, 577-584.
- Janis, J. L., & Mann, L. (1977). *Decision making*. New York, NY: Free Press.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer, Publishing Company.
- (ラザルス, R. S., フォルクマン, S. 本明 寛・春木 豊・織田正美 (監訳) (1991). ストレスの心理学——認知的評価と対処の研究—— 実務教育出版)
- 中島一憲 (2000). 先生のストレス 先生のストレスとその対処法 教育と情報, 503号, 14-19.
- 清水安夫・大宮美智枝 (2002). 高校教師のストレスに関する研究——ストレス評価尺度の開発—— 日本学校メンタルヘルス学会第6回大会抄録集, 34.
- 2007.6.6 受稿, 2008.1.9 受理—

Development of Coping Scale for Japanese Elementary School Teachers

Ichie MATSUO¹ and Yasuo SHIMIZU²

¹ Graduate School of Health Psychology, J. F. Oberlin University

² College of Health and Welfare, J. F. Oberlin University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2008, Vol. 16 No. 3, 435-437

The purpose of this study was to develop Coping Scale for Japanese Elementary School Teachers and to explore its dimensional structure. Results of exploratory factor analysis suggested a four-factor model. Confirmatory factor analysis and reliability analysis supported structural soundness and factor reliability of the scale. Results of hierarchical cluster analysis revealed that the four factors of the scale were classified into two clusters: emotion-focused and problem-focused copings. Higher-order factor analysis for the secondary model based on the result of hierarchical cluster analysis obtained indices that showed satisfactory fit. The scale would be a valuable tool in evaluation studies of coping intervention.

Key words: coping scale, elementary school teachers, higher-order factor analysis